

筑波技術大学

笑顔をつくる造形ワークショップ

チャレンジアートフェスティバル in つくば

総合デザイン学科 伊藤三千代

チャレンジアートフェスティバル in つくば

チャレンジアートフェスティバルとは障害者自らが制作した絵画や造形物の展示並びにダンスや劇などの舞台発表を地域に発信するアートイベントで、毎年つくば美術館でおこなわれます。本学学生は出展と共に本イベントのチラシやポスターのデザイン、ミニ企画やワークショップなどに参画し日頃の学習成果を地域に発信してきました。

本誌では、第16回（2017年3月7日～3月12日）の作品展で実施した造形ワークショップ「笑顔の果物をつくろう！」を紹介します。

企画から準備

今回の開催テーマ「笑顔の金メダル」に沿った内容で、デザイン基礎演習（1年）の受講生14名にワークショップを企画してもらいました。4つのグループに分かれ、それぞれがアイデアを出し合い企画書を作成、材料を準備してパワーポイントで手順を説明します。企画側以外の学生は参加者役となりワークショップを体験し、最後に感想と改善点を話し合いました。1つの企画はオープニングイベントで実施する造形ワークショップとして、他2つを来場者が自由につくれる「造形コーナー」として改良を加えました（図1, 2）。



図1. 「アートなふくわらい」 図2. 「笑顔がなる木をつくろう」

造形ワークショップは学生が考案したオリジナルの「福笑」です。二人一組でおこない、参加する障害のある方と介助する付き添いの方が共に造形の楽しさを享受し笑顔になることを目標としました。学生は運営スタッフとしてこの活動の進行役であり、参加者の補助をするための心構えと綿密な準備が必要になります。障害者の一人ひとりの状況に応じた配慮が必要です。授業で実施したワークショップの体験をもとに、再度、知的障害や自閉症のある方、小さな子どもにとって「わかりやすく伝える」とは何かを話し合いました。簡単な言葉とイラスト、サンプル、実演など視覚効果のある情報で手順を具体的に示すこと、そして制作中の補助はそれぞれの障害によく見られる行動を理解して接することなどが大切です。このため、実施当日まで改善を重ねて十分な準備とリハーサルを行いました。

改良点とWS実施の様子

当日の参加者は40名です。最初に担当する学生5名の自己紹介をして、次に福笑いの要領でどのようにパーツを貼っていくかの手順とお面にするまでの方法を説明しました。1名の学生がパワーポイントを使用して説明し、他の学生がサンプルを提示して手順を説明することで完成形のイメージがわかりやすくなりました（図3）。

作業最初はベースとなる顔の作成です。改良点は、参加者が好きなくだものを自分の顔のサイズで描く方法だけでなく、絵を描くのが苦手な参加者のために事前に8種類のくだもの絵を準備したことです。眉、目、鼻、口、耳の計8つのパーツは初め箱からくじ引きの方法で選んでもらいましたが、時間がかかるため、パーツごとに小袋に入れ、すぐ手に取れるように作業テーブル中央に配置しました

(図4)。パーツを袋から出し、アイマスクをしてそのパーツをくだもの顔の上に並べていきます。目隠しでも裏表面がわかるように紙のテクスチャを変え改良しました。パーツはおもしろ系、アート系、かわいい系で描かれています。学生や介助者の協力を得て手の感触や勘でパーツを置いていきますが、可笑しい目や鼻のパーツの目鼻立ち、滑稽な表情に介助者に笑みがこぼれます。そして参加者がアイマスクを取って自分の作った作品を見た時の驚きと笑顔、予想を超えた顔が出来上がりました(図5)。最後に参加者同士が頭に被った作品を見て会場に笑顔があふれました。

造形ワークショップを通じて

5人の学生は、最初は緊張からか遠慮がちでしたが次第に作業が困難な方に積極的に話しかけ、障害者の一人ひとりの状況に応じて必要な補助をおこなっていました(図6)。この活動を通じて学生自らが地域社会に貢献し、普段の生活や大学の授業では得られない体験をすることは、デザインを学ぶ上で必要な能力を培う土壌、造形活動の礎となります。



上) 図3. 視覚効果のある手順の説明
 中) 図4. 準備材料 / 図5. 完成作品A,B
 下) 図6. 参加者の制作を補助する学生たち

学生の感想

美術館でワークショップを開くという大きな経験はこれまでになかったのが最初は上手

くできるか不安がありました。しかし、その不安は杞憂であり、最終的には自分もお客様と共に楽しんで取り組むことができました。ワークショップで力を入れたところはいかに「わかりやすく」伝え、遊んでもらうか、ということです。実際にワークショップが始まったときはなるべく笑顔で楽しそうに接することを頭に入れてやりました。結果、お客様も笑顔で楽しそうに取り組んでくれたのでとても嬉しかったです。しっかりと段階を踏んで実行するのも大切だと思いますが、それ以上にいかに自分がどこまで楽しんでやれるかがキーポイントであり、将来にも必要になることだと感じました。本当にいい経験ができて良かったです。これから人の笑顔を引き出せるようなことに積極的にチャレンジしていきたいです。(大川実樹菜)

いろいろな障害を持っている方が参加するので、どのようにしたら楽しんでもらえるか工夫が必要でした。40人分のパーツを準備するのは予想以上に大変で、制作スタッフが少なく当日までに間に合うか心配でしたが、参加者に楽しんでもらいたい一心で寝る間も惜しんで作りました。苦勞しましたが、人のために頑張ることはとてもやりがいがあることだと思うようになりました。ワークショップ本番は、参加者どどのようにコミュニケーションするか不安でしたが、相手に伝わるよう手順の見本作品を作り説明の仕方をリハーサルして、身振り手振りをしながら伝えていきました。ワークショップ後、参加した方や協力してくださった施設のスタッフさんから「とっても楽しかった」「またやってほしい」という声をいただき嬉しかったです。参加者の障害を考えながら制作準備していくことは難しかったけれど、勉強になりました。次回は今回の経験を生かしてもっと良いものにしたと思います。(小林美乃梨)

今回のWSを通じて、アートの素晴らしさを伝えられたこと、また、様々な障害を持った方と交流できてたことが非常に楽しかったです。私は自分の障害に対して劣等感を抱いていましたが、参加してくださったみなさんがとても明るく障害を自ら受け入れ頑張っている姿にとっても感動し良い刺激を受けました。(森 厚誌)